

むしは

蝕みの 果実

Seven Easy Pieces

Funado Yoichi

むしば
蝕みの
果実
船戸与一

Seven Easy Pieces
Fumado Yoichi

蝕みの果実

むしばみのかじつ

定価はカバーに表示してあります。

第一刷発行 一九九六年一〇月二日

著者

船戸与一 ふなど よいち

発行者

野間佐和子

発行所

株式会社 講談社



〒112-01 東京都文京区音羽二―二―二一

出版部 ○三―五三九五―三五〇五

電話 販売部 ○三―五三九五―三六二二

製作部 ○三―五三九五―三六一五

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

目次 contents

セレクション・ブルウ	Baseball	5
からっ風の街	Wrestling	47
黄金の眼	Mountain climb	121
コリア・タウン	Taekwondo	185
梟の流れ	Rifle Shooting	235
斑らの蝶	Boxing	281
ミセス・ジョーンズの死	Athletics	331

装帧多田和博
写真芝田满之

蝕^{むしは}みの果実

Seven Easy Pieces

べつに格別の意味があるわけではないが、

ここに集められた短編にはふたつの共通項がある。

まず舞台がアメリカ合衆国。

次に、主要登場人物が何らかのスポーツに関係している。

作品の執筆はほぼ十年まえからぼつりぼつりと行われたもので、

こうして七編を集めてみると、

十年間の日米関係の変遷がおのずと浮かびあがる。

それはそれで一興だろう。

著者

セレクトショングルウ

Baseball

1

一球目のストレートがシュート回転して胸もとを^{えぐ}抉り、二球目は大きなカーヴが外角に曲がり落ちた。アンパイアが^{いな}嘶くような声でストライクを宣し、カウントがワン・エンド・ワンになった。マウンドのデニス・ルーパーはこのイニングを抑えれば、一応、最終セクションに残ることになる。オープン戦といえども、メジャー・リーグへの昇格テストを兼ねているおれたちはだれもが必死なのだ。三球目は自慢の速球がまた内角を衝いてくるだろう。ルーパーがゆっくりとモーションを起こした。

その速球は唸りでも生じてるかのようにすさまじかった。だが、コースも球種もまさに読みどおりだったのだ。タイミングはぴしやりと合った。腰の回転も申しぶんなかった。バットは完全に振り抜けていた。

低い弾道のライナーが左中間を抜けていった。おれはファースト・ベースをまわったところでセクターのビル・ハインズがフェンスからのクッション・ボールを処理するのを見た。打球はそれほど痛烈だったのだ。おれはセカンド・ベースに滑りこんだ。内野への返球は糸を引くようで、スライディングを躊躇していたらアウトだったかも知れない。おれはユニフォームの土埃を払い落としながら立ちあがった。

「すげえじゃねえかよ、ぼうや」セカンドのグレン・テートが言った。「おれだつてなかなかあは打てねえ」

「まぐれですよ」

「謙遜するなつて！ 謙遜して得になることはこの業界にはひとつもねえんだから」

おれは笑いながら肩を竦めてみせた。

グレン・テートは年俸百万ドルを越える超一流のプレイヤーで、おれなんか口を利いてもらえないような存在じゃないのだ。そのパワフルなバッティングに加えて華麗なフィールディング、黒豹のようなこの男がおれたちのチームを相手にいまプレイをつづけているのはもちろんセレクションのためじゃない。ただ、調整をしているだけなのだ。

「とにかく、その調子を持続させることさ。最終セレクションでいまみたいな当たりをかつ飛ばしや、確実にメジャー・リーガーとしてベンチ入りだからな」

「え、ええ……」

テートがマウンドにボールを投げた。

デニス・ルーパーはそれを受けたあと、ちらりとこつちを見やったが、その表情はこころなしに蒼ざめて見えた。投球のまえにボールをこねくりまわすのがこのピッチャーの癖らしいが、その動作もどことなく落ちつきを失くしているように見えた。

動揺の理由は手に取るようにわかる。それは痛打を食らったのがプレイヤーとしては素性も知れない日本人のこのおれだからではない。セレクションを兼ねてこのゲームに出ている連中にそういうくだらない自尊心の生ずる余裕はないはずだった。要するに、相手がだれであろうと、時速九十五マイル（百五十キロ強）の速球をバットの芯で捉えられたことが問題なのだ。ノーアウトでラン

ナーがセカンドにいることが問題なのだ。もう一本、ヒットが出れば、ほぼ確実に点がいいるだろう。昨シーズン、3Aで最多勝をあげたこの豪速球ピッチャーもいまはこのイニングを抑えないかぎり、次の登板のチャンスが巡ってくる保証はどこにもない。ルーパーの顔色が蒼ざめているのは胸の裡をすさまじい緊張感が浸しているからにちがいないだろう。

打席にクリント・ケンプがはいった。

速球がど真ん中に投げこまれた。

ケンプの立ててかまえられたバットはほとんど動きはしなかった。狙っているのはカーヴだけなのだ。それ以外に打つ気がないのは一球目の見逃しかたではつきりわかった。

二球目も真んなかのストレートだった。三球目は内角を衝いた。ケンプがその豪球を避けるように体を引いてバッター・ボックスの外側に崩れ落ちた。そいつはブラッシング・ボールというわけではなかった。大げさなのだ。ケンプは立ちあがると、さも危なかったというふうに首を振ってルーパーを睨みつけた。

セカンドのグレン・テートがそのときするするとベースに近づいた。リードを取っていたおれはあわててそこへ帰塁した。牽制球もすばやくはなかった。テートがそのボールを弄もてあそびながらぐすっと笑い、それからこっちに向かってぼそりと言った。

「やつはこの次、打たれるぜ」

「どうしてわかるんです？」

「ケンプの術中に嵌はまるのはもう眼に見えてる。ルーパーがあれだけ速い球を持っても、所詮、3A止まりなのは結局、頭が悪いからだよ。キャッチャーのニコルも同じさ、スローイングもバッティングも悪かねえのにバッターの心理状態つてものをまるつきり読めねえときてやがる。こ

れじゃ、どんなにしゃかりきになってもメジャー・リーグにはあがれねえよ」

おれはセカンド・ベースに左足をのせてそれを聞いていた。テートがルーパーに返球した。そして、セカンドの定位置に戻るまえにこう断言するのを聞いた。

「いいか、見てろよ、バッテリーはケンプが内角の速球に腰が引けたことに嬉しがって、今度はかならず外角にカーヴを落とす。そこにちゃんとバットを合わせりや、打球はライトまえに転がって……それで終わりってわけだよ。ケンプの狙いはそれしかねえんだ。もう速い球にはついていけねえからな。だから、ああやってわざとらしく地べたに転がってみせたというわけなのによ！」

事実、そのとおりになった。

ケンプのライトまえヒットでおれは一気にホーム・ベースに駆け込み、それからは落胆したルーパーに味方打線が四本のヒットをつるべ打ちした。ユマ球場では三月の太陽が眩しく輝いていたが、バッテリーのメジャー・リーグ昇格の夢は百万ドル・プレイヤーたるグレン・テートの予言どおり無残に打ち碎かれた。ルーパーはその時点で自責点4を記録しただけでなく、ふたりの走者を塁上に残して悄然とマウンドを降りていった。

2

ゲームが終わって、おれは監督のウォルター・コリンズに呼ばれた。クリント・ケンプも一緒だった。理由はわかっている。おれもケンプともに四打数三安打だったのだ。ユニフォーム姿のまま監督室に足を踏み入れると、コリンズが機嫌のいい声で言った。

「明後日^{あさって}のオープン戦にも先発メンバーとして出てもらうよ、ふたりともな」

おれはわざと無愛想に、わかりました、と答えて、ケンプとともにシャワー・ルームに向かった。だが、もちろん、足取りは弾むようだった。明後日のオープン戦が最終セレクションとなる。

そのゲームで決まるのだ、おれがメジャー・リーガーとしてベンチ入りするか、それとも三十四歳になるクリント・ケンプがかりうじてそこに居残ることになるかが。外野のポジションで控えにまわれるのはチーム事情からひとりきりなのだ。明後日のゲームでどっちの活躍が大きかったかでそれが決定される。おれはいまの段階でもすでに満足だった。メジャー・リーガーの入り混じるこれまでのオープン戦でここまでやれるとは思ひもなかったからだ。鼻唄を唄いながらシャワー・ルームに向かって歩きつづけた。

「やけに機嫌がいいな」肩を並べてるケンプが言った。「そいつは日本の唄かい？」
「え、ええ」

「まあ、機嫌がいいのもわかるよ。おまえが打った三本のヒットはどれも火の出るような当たりだったからな」

シャワー・ルームに向かう通路で控室から出てくる何人ものプレイヤーと擦れちがった。調整を兼ねてきょうのゲームに出場していたレギュラー・プレイヤーは悠然としていたし、最終セレクションに残ったプレイヤーは嬉々としていた。逆にこの日でメジャー・リーガーとしての芽を摘み取られた連中はいかにも足取りが重そうだった。

「それにしても、どういう具合でこのセレクションを受けることになったんだい？ 日本から、直接、このユマに乗りこんできたわけじゃないだろう？ それにしては英語が滑らか過ぎるものな」
「二年間ほどドミニカン・リーグでプレイしてましたよ」いまは五分の競争相手とは言え、向こうは一応、メジャー・リーガーなのだ。口の利きかたには充分、気をつけなきゃならない。「それか

ら、一年間、メキシカン・リーグにいました」

「日本では？」

「あつちにもマイナー・リーグみたいなものがありましてね、そこで三年間やって、結局、お払い箱です」

「あんなすごい打球を飛ばせるのに、^{くび}鹹首にされたのか？ 日本のベースボールも満更、捨てたものじゃないな」

「そうじゃありませんよ。日本ではまるで打てなかったんです。フィールディングには自信があつたけど、バッティングはさっぱりだった。それが去年、メキシカン・リーグで急に膝の使いかたを覚えたんですよ。そのおかげでタイミングがびったり取れるようになった。おかしなものですね、まったく、プレイヤーつてものは……」

「そう思うことがあるよ、おれも」

「偶然に偶然が重なるんですよね」

「何のことだい？」

「メキシコのチワワでやったゲームでおれはホームランを三本もかつ飛ばしたんですよ。膝の使いかたを覚えてまもないころだった。打球はどれもライナーでレフト・スタンドに突き刺さりましたよ。それをこのチームの監督のコリンズさんがたまたま観てたんです。で、特別にメジャー・リーグのセレクションを受けないかと勧誘されたというわけです。もしコリンズさんがあのときチワワを訪れていなかったら……」

「だとしても、いずれ、おまえはこうなつたよ。あれほどのバッティングをしてるんだ、このチームじゃなくとも、どこかの監督の眼にはかならず止まるさ」

おれたちはふたりにでシャワー・ルームにはいった。なかにはもうだれもいなかった。他の連中はとつくにふつうの服に着替えて帰途につきはじめてるのだ。おれとケンプはユニフォームを脱いで合板で仕切られたシャワー・ボックスにそれぞれ足を踏み入れた。

ケンプのシャワーの音が熄むのはかなり早かったように思う。メジャー・リーガーとして生き残れるかどうかの瀬戸際に立たされてるこのプレイヤーにゆっくり汗を流す気持のゆとりはなかったのかも知れない。

だが、おれはシャンプーを使って丹念に頭髮を洗い、それから石鹸を体の隅々まで擦りつけて汗も垢もすっかり落とした。そのあいだじゅう、鼻唄がひとりで出てくるのはやはり嬉しさがふつふつとこみあげている証拠だろう。おれはバスタオルを体に巻いてシャワー・ボックスを離れた。私服を入れたロッカーに近づいたとき、隅のジュラルミンのベンチにケンプが座っているのが見えた。表情は固かった。ケンプはこのおれが衣服を身につけるのを待って重々しくこう言った。

「頼みがあるんだがな」

「何でしょう？　まさか、明後日の最終セレクションでおれに打たないでくれと言うわけじゃないでしょうね？」

クリント・ケンプの眼のしたの筋肉がその一瞬、ぴくぴくと顫えた。そして、薄い唇をゆっくりと拭ってこう言った。

「冗談にせよ、そういう舐めた口は利くんじゃねえ。おれにだって現役メジャー・リーガーとしての誇りってものがあるんだ」

「すみません、いい気になってくだらない冗談を言いました」

ケンプはしばらく黙りつづけた。

おれが話の腰を折ったのだ。

二度も三度もケンプは唇を拭きなおした。

「何なんです、頼みって？」

「いまこのユマに日本から来てるらしいんだよ」

「何がです？」

「日本のベースボール・チームのフロント・マネージャー連中が物色に来てると聞いてるんだ。日本ではプレイできるこっちのプレイヤーを探しに何チームかがな」

それはおれも知っている。在京球団が一チーム、在阪球団が二チーム、合わせて三チームのフロントがユマに滞在していた。在京球団は三年まえにおれをお払い箱にしたチームだが、このユマではそのおれに甘ったるい言葉を投げかけてきているのだ。もちろん、それは拒わった。メジャー・リーグに昇格できなかったとしても、ふたたびメキシカン・リーグでプレイすればいいだけのことだ。いまのおれには日本に戻る気なんかさらさらありはしない。

「その連中にこのおれを売りこんで欲しいんだよ」

「どういう意味です？」

「わかるだろう、最終セクションの結果がどうなるかぐらい……」

おれは何も言いはしなかった。

「何歳なんだ、おまえ？」

「二十五歳ですよ」

「プレイヤーとしてこれからどんな伸びる年齢だし、監督のコリンス好みのパワフルなバッターだからな、最終セクションでどっちが選ばれるかはもうはっきりしてるんだ、そうだろう？」